

狩獵場を想定するため

——青梅市新町出土の石鏃等を中心として——

伊藤 博 司

一 はじめに

現在都内多摩川上流地域で周知の遺跡として知られる遺跡数は、奥多摩町で五十一、青梅市で百五十六、羽村市で九、福生市で十六遺跡である。その種類を概観すると包蔵地や集落跡、遺物散布地等の数が多くほぼ統一される。^{注一}近年のめまぐるしい開発に伴い緊急調査される対象遺跡も当然同様となる。調査によって発見される遺構と遺物は、この地方の歴史を物語る数少ない事実として残されていく。

しかし、私たちの発掘調査の対象地は、当時の生活の中心部に集中していると言っても過言ではなからう。つまり、把握されている遺跡のほとんどが表面採集によって遺物有無の確認と周辺地形等が考慮された遺跡範囲、地上に残されている遺構の存在によって認定された遺跡等であるので調査によって実証された遺跡は少なく、発掘調査されてな

い遺跡にはどうしても遺跡認定への偏見が生じてしまうのではないだろうか。『こんな場所に人々が生活できたのであるうか』などという口走ってしまう例は多々あるが、それはやはり私たちの遺跡に対する認識不足に他ならない。

遺跡とは『過去に人間・人間集団の行動のおこなわれた痕跡の残された場所……』^{注二}であるからして、決して集落範囲のみで生活が営めた訳ではない。現代の私たちの生活一つをとってみても理解できる。ましてや自然にすべての糧を求め、また、ある程度の人數で生活するには空間や領域が絶対必要となる。その領域の決定にはその概念を基本として現在も活発に進められている。^{注三}

また、遺跡間の情報領域を具体的に考える研究は型式学を用いた研究成果、主に土器や石器などの型式から積極的に進められ、さらに集落とその生活環境復元も試みられて

いるが、日常生活の具体的な空間研究は少ないと言えよう。武蔵野台地の頂部付近も多摩川流域を主として、発掘調査は年々増加の一途をたどり、発見された事実も平行に増加してきているが、遺跡破壊と保護という相反する事柄を考えると喜ばしいものか悲しむべきものか複雑な心境である。ここでは少ない資料の中ではあるが武蔵野台地頂部に展開された縄文時代の人々の生活痕跡を考えるに必要な資料分析の方法と実例を紹介し、^{注四}生業空間としての狩猟場を想定してみたい。

二 青梅市新町地区発見の石器群について

ここに紹介する石器群は、青梅市新町地区で発見された松永誠治氏の所有する遺物で旧石器時代～縄文時代に属するものと考えられる。すべて貴氏所有地から発見されたものであるが農作業の傍ら発見された遺物ということで、聞くところによると松永氏御夫妻を中心に同家の皆さんの実に五十年にわたる努力の賜物である。考古学を学ぶ一研究者として貴重な資料の保管に対し、また今回の資料紹介に快く了解していただいたことに対して衷心よりお礼を申し上げたい。

さて、発見された合計九十七点の資料について各遺物の特徴を把握し実測したが、旧石器時代～縄文時代に属する遺物の出土遺跡としては河川流域や湧水地付近に存在する

集落跡等を連想するが、この地は深い井戸を掘ることによってようやく生活が営めるといふ新町地区での発見ということで、出土地には驚嘆せざるをえなかった。また、私もこの石器を拝見した昭和六十二年の六月から、暇を見つけては出土地を訪れているが遺物を発見できないでいる。

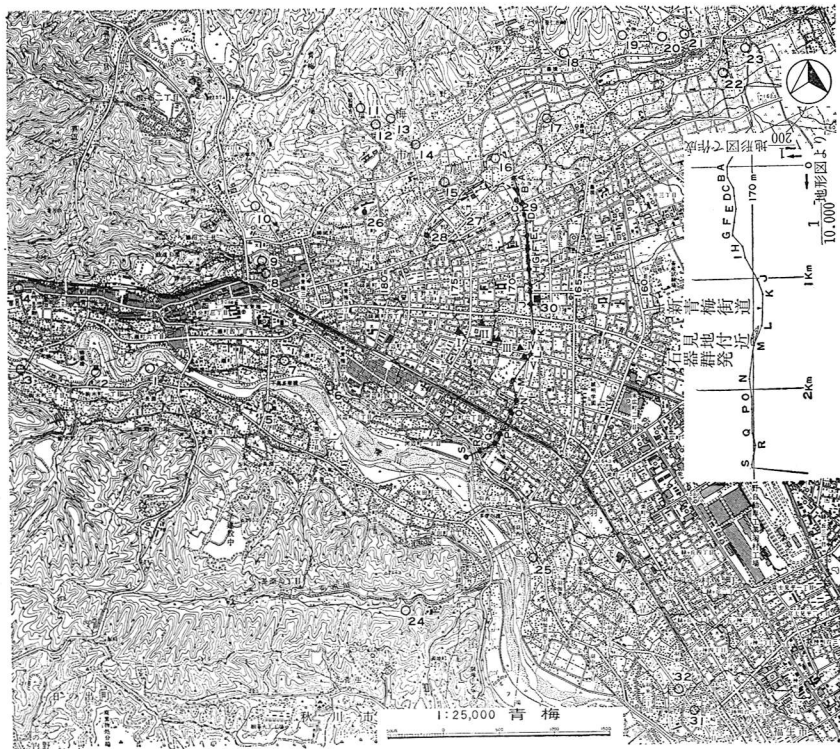
つまり、こうした石器は、易々と発見されるものではなく、また集落跡の表面採集では石器片等が石器より多く採集されるのに対して、まったく石器以外の遺物は発見されないらしく、私も表面採集によってそれは確認している。

つまりいわゆる集落等の生活の拠点となる遺跡とはかなり違った要素を具備した遺跡として考えなければならず、それゆえ逆に当時の生活復元にとって重要なヒントを具備している可能性があるろう。ではいったい石鏃等の出土遺物がどのような理由でこの地に残されたものであろうか。

三 石器群出土地の概観と周辺の遺跡

慶長十六年（一六一一）に新田開発が着手され現在に至る青梅市新町は、いわゆる武蔵野台地の頂部付近に所在し青梅市街地より東へ約3kmに位置する。新町地区より南に東流する多摩川（武蔵野台地南端）までは直線距離にして約一・五km、北部の加治丘陵と平行に東流する霞川へも直線距離にして約一・三kmある（第1図）。

確実にこの地に生活が営まれるのは、吉野織部之助を筆



第2図 台地のシームレーベレ地形図より

第1図 石器発見地と周辺の遺跡分布図 (▲印石器群発見地, ○印集落存在が考えられる遺跡
 ・エレベーションポイント, ■印新町の大井戸)

頭とする江戸初期の開拓からである。まず生活に欠くことができない水の確保が必要であったらしく、織部之助実筆の『仁君開村記』を紐解くと井戸の構築は開村着手後二年の慶長十八年には着手^{注五}されている。さらに開拓事業は元和二年に成功の目的がたつたとされるが河川より1km以上離れた台地中部での開拓は、まさに井戸水の確保こそ開村成功への先導者となったと言っても過言ではなからう。ゆえに、そのままの状況では長期滞在(定住等)には不可能に近い場所であったと想像される。石器群の出土した地域は、現在の新青梅街道の南に位置し、青梅市野上四丁目付近(第1図I)・字新町頭付近(第1図II~III)・字蔵屋敷付近(第1図IV~V)であり、この地の海拔は百七十mから百七十五mの等高線内に納まる(第一図)。

この周辺の地形は、J R東青梅付近の海拔百九十二mから東に向かって徐々に傾斜し、また、一万分の一地形図

を基に作成したAとS
 点の台地縦断のエレベ
 ーションを作成すると、
 微妙ではあるが起伏が
 確認でき（高低差は二
 百分の一を基に作成）、
 新青梅街道および新町
 の大井戸が存在するM
 とJ付近は最も低い位
 置にあたり谷状を呈し
 ていることが理解され
 る（第2図、写真一・
 写真二）。

これは、石器群存在
 の意義を考える場合の
 数少ない情報の一つと
 して、石器発見場所が
 緩やかながら北面した
 斜面地に集中している
 ことに一応注意してお
 きたい。ちなみに新町
 地区では、他に転々と
 尖頭器、石鏃が発見さ



写真一 H地点より南へのぞむ



写真二 K地点より北へのぞむ

れているらしいが、松永氏の所有する周辺地域での石器の
 発見はないらしく、このIとV地点付近が最も集中してい
 るとのことである。ちなみに採集ポイントIとV地点は東
 端と西端とに約八百mの距離を求めることができる。
 発見されている九十七点の石器は、二点の旧石器時代に
 属する石器を除くと他はすべて縄文時代に属するものと考
 えている。

ここで石器の発見された地域を中心として四〜五kmの範
 囲に所在し、かつ集落跡と確実に考えられる遺跡を紹介し
 ておきたい（第1図○印）。

多摩川流域では、縄文時代早期：24大荷田遺跡、中期：
 2駒木野遺跡・4裏宿遺跡・25精進バケ遺跡・31羽ヶ田上
 遺跡・32山根坂上遺跡、後期：1喜代沢遺跡・5寺改戸遺
 跡、晩期：1喜代沢遺跡。

霞川流域では、縄文時代前期：20城の腰遺跡・12打越遺
 跡、中期：18丸山遺跡・17藤橋城跡（復合遺跡）・20城の
 腰遺跡・9大塚山遺跡・23谷野上遺跡、後期：下前遺跡・
 22原今井遺跡。

また、旧石器時代の茂呂型ナイフ形石器を伴うブロッ
 クが三地点発見された20城の腰遺跡と木葉形の尖頭器が伴う
 ブロックが発見された18丸山遺跡も存在していることを付
 記し本群中の石器と対比できることを指適しておきたい。
 なお、ここで集落跡と考えられる遺跡の概念は調査された

遺跡はもとより、表面採集の結果得られた出土遺物の内容や立地条件を加味したもので、少なくとも同時期で数軒からなる住居跡が存在すると考えられる遺跡であり、ちょうどセトルメントパターンでいうところのA-C程度の遺跡を想像している。^{注八}

四 発見された石器の特徴

九十七点の石器の中で実に九十三%が縄文時代の石鏃である(有舌尖頭器も含む)。ある意味ではこの石器群の特徴はこの石鏃の量の多さであるとも言えよう。そこで各石鏃の特徴を導き分類した。分類基準は石器が保有する属性を型式学的に選出し、共通する属性と相違する属性を各々導くことに主眼をおいた。

その属性の一つを具体的に示すならば形態と石質である。この場合、形態を把握することは剝離の方向をしつかりと観察し認識することこそメルクマールとなる。さらに従来から行われている底部の形態の相違を求めることが石鏃形態把握の場合は大分類の根幹をなすと思われる。^{注九}また、至極当然ではあるが、凹基無茎鏃と平基無茎鏃とでは基部の剝離の方向はまったく違う訳である。平基の場合は直線的に先端部に向かって剝離を行うが、凹基の場合は基部を扶るがゆえに中心線より外方向に力を加えない限り製作はありえない。逆に、凸基有茎石鏃の場合は基部を底辺より突

出させるため、基部の凸部は中心線に向かってほぼ直角に剝離を行わねば製作ができないのである。さらに、ここに紹介する石鏃にはごく細かな第二次剝離が一部の側縁や基部先端部にみられ最終的な形態を決定づけている。この細かな調整剝離は石鏃製作における最終的な形態の調整作業(第二次剝離)と考えられ、現に石鏃を製作してみると、この第二次剝離(ある意味では最終の補助剝離ともいえる)は、左右対象にする時等には欠かせない最終作業工程となるようである。例えば第5図8は右側縁に、同図11は左右先端部と両脚部先端部付近に第二次剝離が観察でき最終の調整剝離を思わせる。同図74などは先端部近くの両側縁に三角の突出部が認められるが、これも第二次剝離によって突出させて形態決定への大きな役割を果たしている。また反対に一度の剝離で形態を決定しているものも存在する。この石鏃群を見る限り(欠損したものも含めるが)前者と後者の割合は五対三となり、比較的大きい(容量の大きい)、しかも先端部や脚部端や折り部の鋭利な角度のものに多く最終調整剝離(第二次剝離)が認められる傾向である。

形態分類の根拠とした模式図を第4図に示した。合計九十七点の石器の内、石鏃(有舌尖頭器も含める)九十点を主に基部形態から四種(I~IV)に分類し、さらに剝離の方向観察から側縁部の形態および脚部の形態を考慮したところ三十二種(1~21など)に分類できた。また、いわゆる

る投影した形態は同じでも容量の違うもの、つまり「かたち」が同様でも大きさの違いがあるものについてはほとんど大中小で理解されるが一応分類の基準を与えた(A~D)。また、欠損しているが復元できそうなものについては、形態所屬の権利を与えた。

こうした分類の必要は、石鏃などのいわゆる飛び道具が出土遺物の主体をしめていること、遺跡の本質を考えるために集落跡等で出土した石器とより具体的に比較研究をするためであり、石鏃だけではなかなかできない時期決定や同じ形態の石器が出土する遺跡との関連性を考察するための基礎的作業と考えられるからである。この作業は各々の石器がもつ属性をより細かに抽出することによって成り立つ訳であり石材の相違も重要である。つまり、黒曜石製のものは少なくとも原材料は他所から持ち込まれたものであるが、チャート製や酸性凝灰岩製のものはこの周辺地域から産出した原材料が用いられた可能性を具備しているわけで属性の重要な構成要素となり得よう。

ここで分類された石器の特徴を示すが、紙面の都合上、箇条書きにすることを詫言しておきたい。

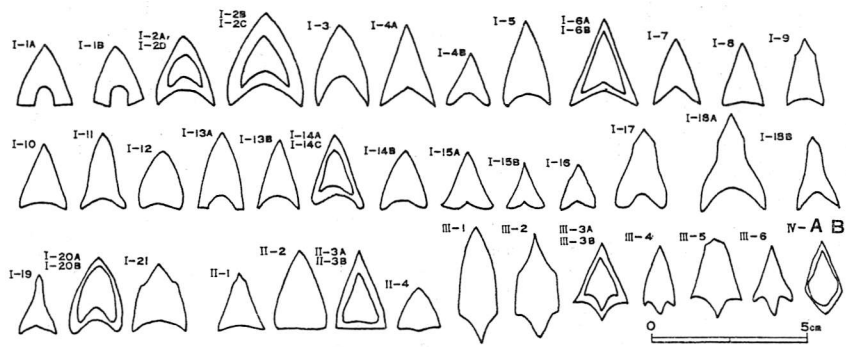
① 旧石器時代の石器(第4図)

1 ナイフ形石器、現況からほぼ1-2欠損と考えられるが、ハーフナイフ形石器として利用に耐えたものかもしれない。

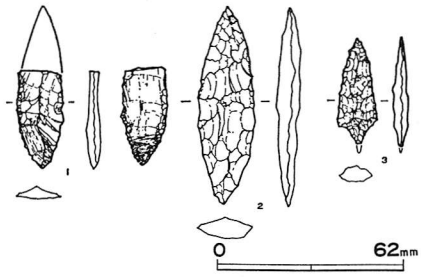
チャート製で基部調整剝離とブランディングが施されている。尖頭器2は、凝灰岩製で完形。表裏ともに剝離が著しい。

② 縄文時代の石器(第4図・第5図)

特に石鏃は、剝離の方向を見極めることによって基部および底辺の形態的特徴を中心として大きく四群に分類されたが、I群はいわゆる凹基無茎石鏃、II群は平基無茎石鏃、III群は凸基有茎石鏃、IV群は凹基石鏃の概念からここでは菱形石鏃と呼ぶ。凹基あるい



第3図 石鏃形態模式図



第4図 石器実測図

はやや極端な表現となるが菱形の石鏃の場合の剝離方向は、底部を半円状に囲むように剝離が施されねば作出できない。^{注11}

I群・凹基無茎石鏃

I群1類A：4は、い

わゆる鋳形石鏃でチャート製。B：5・6はAと脚部端の形態が若干異なり、黒耀石製で局部磨製である。

I群2類A：胴部の容量が大きく脚部が内湾する。黒耀石製は8、酸性凝灰岩製は7・9・10。チャート製は21。B：Aより全体の容量増す11は黒耀石製、81はチャート製。C：Aより全体の容量減る。58はチャート製。D：Cより容量がさらに減る。63が黒耀石製で64はチャート製である。I群3類：I群2類に似ているが脚部が細く、挟りが深い。12・14が黒耀石製。

I群4類A：突出部が鋭く幾何学的で身が長い。15・19がチャート製で29は黒耀石製である。B：Aより全体の容量が減る。24と25はチャート製。

ト製が20・22である。

I群6類A：二等辺三角形を呈し挟り込みの角度が大きく幾何学的。23はチャート製。B：黒耀石製は28。

I群7類：4類に似ているが側縁部が湾曲する。26・27はチャート製。黒耀石製の73も本類だろう。

I群8類：二等辺三角形を基本とし底辺を微妙に挟るもの。37・39はチャート製。

I群9類：先端部近くの両側縁部に突出部が作り出されている。40・41ともにチャート製。

I群10類：底辺は極緩やかに弧を描く。42・44・50はチャート製。

I群11類：細身でやや胴張りの形態である。チャート製の45・49・51。

I群12類：突出部がだらしなく剝離され側縁が胴張りでチャート製の52。

I群13類A：比較的細身で挟り部が顕著。チャート製は53、黒耀石製の55も同タイプと考えられる。B：やや容量が少なく54はチャート製。

I群14類A：直線の側縁と直線の凹基部が特徴。チャート製76。B：容量が小さく77は黒耀石製で78はチャート製。C：さらに容量が小さく黒耀石製の56。

I群15類A：脚部が末広がり側縁部が内湾する。チャート製は59と60。B：容量がAより小さく、チャート製の57

が相当。

I群16類：小形だが均整がとれ剥離も整っている。チャート製で61・62が相当。

I群17類：両脚部の先端部が丸く鋭くなく側縁が内湾する。65・66はチャート製。黒耀石製の欠損している67も同類とした。

I群18類A：側縁中央部でかなり内湾し、先端部と脚部端は鋭く剥離も慎重である。チャート製の69。B：容量が少ないチャート製の68。

I群19類：脚部が広がり先端部が細い。チャート製の70が相当。

I群20類A：いわゆるハート形。チャート製の71。B：容量が少ないチャート製の72。

I群21類：側縁が突出し先端部を鋭くしている。いわゆる有段側縁の石鏃で74は黒耀石製。

II群：平基無茎石鏃

II群1類：正三角形に近い形態をもつが先端部は鋭く尖らしてある。チャート製の30・32が相当。

II群2類：容量が大きく二等辺三角形状を呈する。側縁下部で内湾し、33はチャート製である。

II群3類A：2類に酷似するが側縁下部が内湾せず直線的で34は黒耀石製。B：Aの約1/2の容量で35はチャート製である。

ト製である。

II群4類：ほぼ正三角形で小形36は黒耀石製。

III群：凸基有茎石鏃

III群1類：いわゆる有舌尖頭器で第3図3はチャート製である。草創期の所産と考えられるがここでは一応III群として取り扱った。

III群2類：容量が本群の中でも大きく側縁の先端部に近い位置に突出部がみられる。83はチャート製。

III群3類A：側縁部が抉れ底辺端部が末広がる84はチャート製、黒耀石製の85も同タイプだろう。B：容量の小さい87はチャート製。

III群4類：側縁部が内湾し特に底辺端部が顕著である86はチャート製。

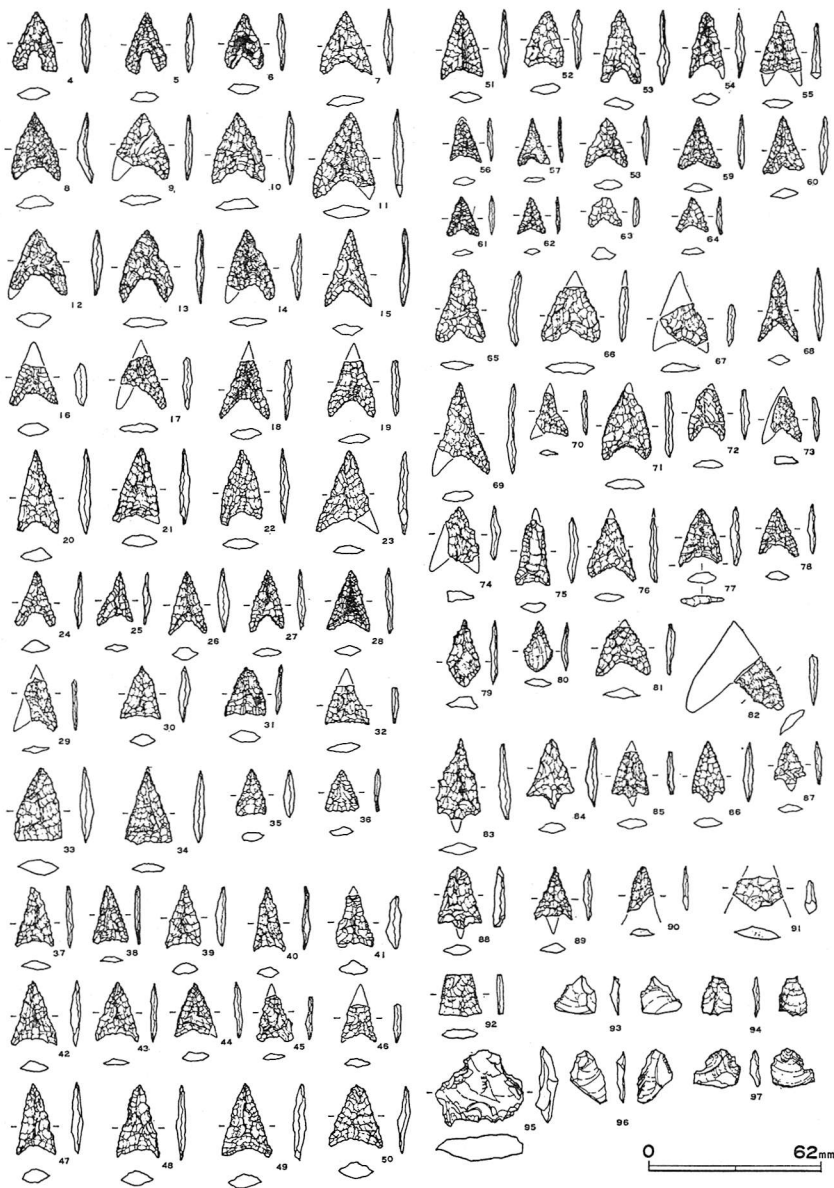
III群5類：先端部付近の両側縁が屈曲する。88はチャート製。

III群6類：側縁が反り底辺端が鋭い89は黒耀石製。

IV群：菱形石鏃（円基石鏃）

IV群A：剥片面を残し位置殿剥離仕上している。79および80はともに黒耀石製である。B：容量が小さい80。

その他の石器として側縁部に極細かな剥離痕を有する黒耀石製のフレイクが4点（93・94・96・97）とチャート製



第5图 石器实测图

型式	石質			チャート				酸性凝灰岩	合計 点数
	透明	黒	その他	青色	灰色	緑色	その他		
18類 A B						1			2点
							1他		
19類	1								1点
20類 A B					1				2点
21類		1							1点
II群 1類	1			2					3点
2類					1				1点
III群 7点 3類 A B	1								2点
				1					
4類	1								1点
IV群 1類 2類					1				1点
III群 8点 3類 A B	1			1					3点
				1					
4類					1				1点
5類					1				1点
6類	1								1点
IV群 2点 A B		1							2点
		1							
形態不明	1	1				1			3点

第2表 石鏃の統計表

型式	石質			チャート				酸性凝灰岩	合計 点数
	透明	黒	その他	青色	灰色	緑色	その他		
I群 1類 A B						1			3点
		2							
II群 6 9 点 2類 A B C D			1	1	1			3	10点
						1			
3類	2	1							3点
4類 A B	1			2	1	1	1他		8点
					1	1			
5類				1	1	1			3点
6類 A B				1					2点
		1							
7類		1					2		3点
8類				2		1			3点
9類				2	2	1			5点
10類				3		1			4点
11類				1	1	2			4点
12類				1					1点
13類 A B	1					1			3点
	1								
14類 A B C				1					4点
	1			1					
15類 A B				1		1		1他	3点
16類 A B				1					2点
17類		1		1			1他		3点

第1表 石鏃の統計表

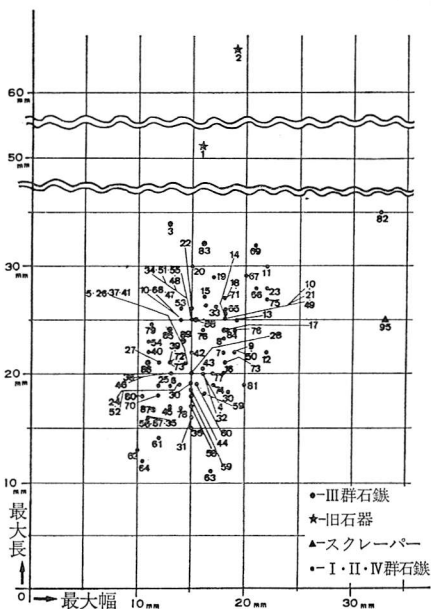
のスクレーパー状の石器(95)が見られる(第5図)。

五 発見された石鏃群の特徴

当初、型式分類は不可能と考えられたが、九十点の石鏃の中にも数点間の同一タイプの存在が確認でき、この同一タイプの存在こそ周辺の集落遺跡出土の石器との比較研究を通じて、より強い遺跡間の連鎖関係を考察でき、さらにその歴史的叙述を確固たるものにできるのでないだろうか。しかるに同一タイプが周辺の集落遺跡で出土しようとも同じ集団の何らか行爲の結果であるとは即断できない。しかし、比較研究による今後のデータの積み重ねは共通の属性把握と生活復元への可能性のより強い正統性を導くことができるものと考えられる。

第1・2表は形態分類された石鏃を石質別に数値で表したもののだが、色調は肉眼観察によるもので検視によっては異なるかも知れない。

ただここで認識しておきたいのは、最も出土型式数の多いものがI群2類で一一%、ついでI群4類の八%、あとはI群9類・10類・11類・14類等が続き各五%程度となる。石質は何と言ってもチャートが最も多く全体の約六六%をしめ特に青色チャートの製品の数が多い。これはやはりこの周辺地域にみられる秩父古生層に含まれたチャートの原産地の存在からであろうか。この周辺の集落遺跡において



第6図 石器の大きさ

最もピークを見つけることができそうである。

石鏃群は縄文早期以後・晩期に至る形態を具備しているものと想像できるが、具体的な年代の把握は今後の研究課題とせざるをえない。

六 まとめ

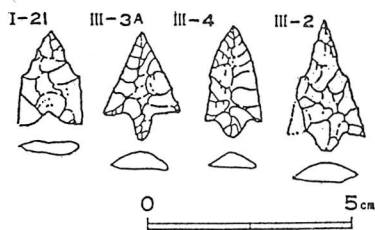
ここでは武蔵野台地におけるこうした石器群の確実なる存在を紹介することに重きを置いたが、最後にこの遺跡の意味を考え、それを想定してみたい。

それには旧石器時代から縄文時代に至る石器群の中で実に九五%が狩猟用とされる石器であることにまず注目しなければなるまい。次に、石器群発見地に最も近い集落遺跡や河川までは1km以上の距離があること、そして、こうした石器以外の出土遺物がまったく発見されないことなども念頭に置かねばならないだろう。この事実関係からでも河川流域に存在するいわゆる集落遺跡とは内容を異にした遺跡と考えざるを得ない。出土地はほぼ東西に八百mの範囲に存在するが、新町地区での他の地域でも点々と石鏃等が発見されることがあるよう^{注十二}で、それは至極当然のことのようにも考えられる。つまりそれはこの地が狩猟場であった可能性を強くもっているからであり、同じ台地内でも違う台地内でもこの新町地区のような事例を発見することができるであろうし、広い範囲での事例の選出によって当時の

もこうした傾向、つまりチャート製石鏃の出土の割合の大きいものと容易に推察されよう。

また、酸性凝灰岩製の石鏃がI群2類Aにしか認められないことも興味深い。現段階では石器群の中でもこのような特徴的な石器の属性の抽出によって集落遺跡との関連性を考えることが、本遺跡のもつ意味を考察する作業の第一段階と考えている。

石器の大きさについては、最大幅と最大長を基準とし、第六図に示したが、本石器群の石鏃の場合、最大幅が1cm〜2・3cm、長さが1cm〜3・2cm程度の大きさに集中が求められ、特に最大幅1・5cmと長さ2〜2・5cm程度に



第7図 喜代沢遺跡出土石鏃
(昭和53年度概報より)

ある領域空間を考察できる重要なポイントとなる可能性を秘めている。つまり、当時の集落を考えるには、その生業地を考察していく具体的研究も今後は必須と考えられる。

石器群の発見された北部に新青梅街道が東西に走るがその周辺は微妙な起伏のあるこの周辺での武蔵野台地で最も低い位置にあたる。この地区には「みずみち」と言う言葉が残っているが、かつては、大雨の降った後などに周辺の水が低い方に集中し、徐々に河の様になって師岡地区から新町の大井戸方向へ達し、さらに新町中学校方面の東部に音をたてて流れたと言う。この仮の河川とも言うべき低い土地のことを「みずみち」と言う。こうした地形の特異性はかつての植物や動物層の生活空間を変化をあたえたこと

も容易に想像されるわけであり、そうした状態に適応し、利用した縄文時代の人々の狩猟場であっても何等不思議ではないと考えられる。

「むしろ『にた・ぬた』待ち^{注十三}の伝承から、この周囲にも動物の習性を熟知した狩猟民が狩猟に訪れたとしても自然ではない。そう考えてみると、この地も重要な遺跡の一

つと成り得よう。台地の北端近くに存在する霞台遺跡からも狩猟用と考えられる縄文時代の陥穴が検出されている。^{注十四}さらに、ここに紹介した石鏃のなかで縄文後期〜晩期に集落が営まれた喜代沢遺跡の出土石鏃と同タイプの特徴ある石鏃を見出すことができる(第7図)。かといって即座

に両者を関連付けるのではないが、こうした比較研究作業によって当時の生活空間を復元するに重要な役割を最も強く表す可能性のある遺物だと考えている。縄文文化研究の中で概念づけされた当時の生活環境復元を具体的に進める必要を痛感するわけで、今後周辺遺跡の出土遺物をより多く拝見し比較研究を行いたいと思う。

また、広い武蔵野台地内の他の地域での同様な事例や他台地での類例を調査してみたい。先学諸氏の御指導、御鞭撻を賜りたい。^{注十五}

本論文を作成するにあたり、原稿作成に特段の御配慮をいただいた川鍋幸三郎先生、図版作成に御協力を賜った木下裕雄氏に対し、文末となりましたが記して感謝し申し上げます。

注一 東京都教育委員会 一九八八 『東京都遺跡地図』

注二 一九七九 『世界考古学辞典』 平凡社

注三 後藤和民 一九八二 「縄文集落の概念」 『縄文文化の研究』 8等

注四 本論は吉田格先生古稀記念論文集に掲載した文章と図版

の一部を使用し、再執筆したものである。

注五 馬場憲一他 一九九一 「仁君開村記」『東京都古文書集

第9巻 吉野家文書』東京都教育委員会

注六 伊藤博司 一九九一 『城の腰遺跡・霞台遺跡』青梅市

教育委員会

注七 青梅市教育委員会 一九九二 『丸山遺跡―第I～IV次

調査の概要―』

吉田格・伊藤博司 一九八九 『丸山遺跡』『東京都遺跡調

査・研究発表会14』東京都教育委員会

注八 小林達雄 一九七四 「多摩ニュータウンの先住者・縄

文時代のセトルメント・システムについて」『月刊文化

財』第一一八号

注九 鈴木道之助 一九九一 『図録 石器入門事典 縄文』

柏書房

注十 注六に同じ

注十一 形態分類は、石鏃の底部、側部、脚部の両稜形を重視

した。

注十二 原島峯夫氏の御教授による。ただ現在、長期間で同じ

地形であったとは確定および確認ないが。

注十三 千葉徳爾 一九七五 『狩猟伝承』財法政大学出版局

直良信夫 一九六四 『古代人の生活』至文堂

注十四 青梅市遺跡調査会 一九八〇 『霞台遺跡群―昭和

五十四年度調査概報―』

伊藤博司 一九九一 『城の腰遺跡・霞台遺跡』青梅市教

育委員会

注十五 吉田格 他 一九六七 「北多摩北部地区における考

古学上の調査」『北多摩文化財総合調査報告 第2分冊』

参考文献

和田哲 他 一九九〇 『精進バケ』羽村町精進バケ遺跡

C・Tキーリー 他 一九八一 『羽ヶ田上・山根坂上遺跡』

羽村町羽ヶ田上・山根坂上遺跡調査会

久保田正寿 一九七一 『青梅市の埋蔵遺跡』青梅市教育委

員会

三上徹也 一九九〇 「縄文石器における「完形品」の概念

について」『縄文時代I』縄文文化研究会

市川光雄 一九七九 『森の狩猟民ムブティ・ピグミーの生

活』人文書院

青梅市遺跡調査会 一九七九 『喜代沢遺跡発掘調査概報』

追記 私事ではありますが、本論文作成中に父が他界した。

闘病中に本論の構成を快く聞き入りアドバイスを与えて

くれた父昇に対し、本文を墓前に捧げ冥福を祈りたい。

(いとう・ひろし 青梅市郷土資料室学芸員 青梅市在住)